



地理的記載者としてのリンネ：
〈スコーネ旅行〉を通して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚田, 秀雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004669

地理的記載者としてのリンネ

——〈スコーネ旅行〉を通じて——

塚 田 秀 雄

1. はじめに

リンネの旅行記 カール・フォン・リンネ Carl von Linné (1707-78) の生物分類学上の成果は *Systema naturae*, 1735. や *Species plantarum*, 1753. に集大成されていると言われるが、この基礎となったのは度々の旅行の際の観察と資料収集である。この旅行は留学したオランダやイングランドへの他に、国内でラブランド(1732)、ダーラナ(1733) エーランドおよびゴトランド(1741)、ヴェステルイエートランド(1746)、スコーネ(1749)と全域に及んでいる。その都度、リンネは旅行記を刊行しており、これらは単に生物学上の貴重な記録のみではなく、それぞれの地方の経済、社会、文化に関する情報に満ちている。旅行記は日記の体裁をとっているが、その内容は生物学者がその研究旅行に際してたまたま見聞した事柄を書き止めたといったものではない。とりわけスコーネの場合は、当初から、資源の有効利用の方法を発見することがリンネに課せられた任務であり、従って、農業や農村の綿密な観察と正確な記載がこの官費による旅行の目的であった。

スコーネ旅行 〈スコーネ旅行〉 Skånska resa の序文で著者リンネはこの旅行がなされるに至った経緯について簡単に触れている。⁽²⁾ 1747年の国会で、大臣カール・ハーレマン Carl Hårleman がより良い国土利用のためには 国土についての 正確な知識が必要であると述べ、その任に適するのは既に多くの旅行経験を有し、博物学の権威でもあるリンネ以外にないとして、彼をスコーネに派遣することを提案し、これが承認された。ハーレマン自身もスコーネ旅行の経験があり、当時、石膏、火打石、銃床用クルミ材の輸入が大きな財政負担となっていたことに鑑み、それらのスコーネにおける存在を確信していた彼は、その資源調査を含めた地域研究をリンネに求めたのである。1747～48年は前回の旅行の疲れが未だ癒えず、父の死、学問上の批判、ハーレマンとの不和なども重なって、リンネはこれを拒否したが、1749年に至って王命に従わざるを得ず、4月29日、ウブサラを出発してスコーネへと向かった。⁽³⁾

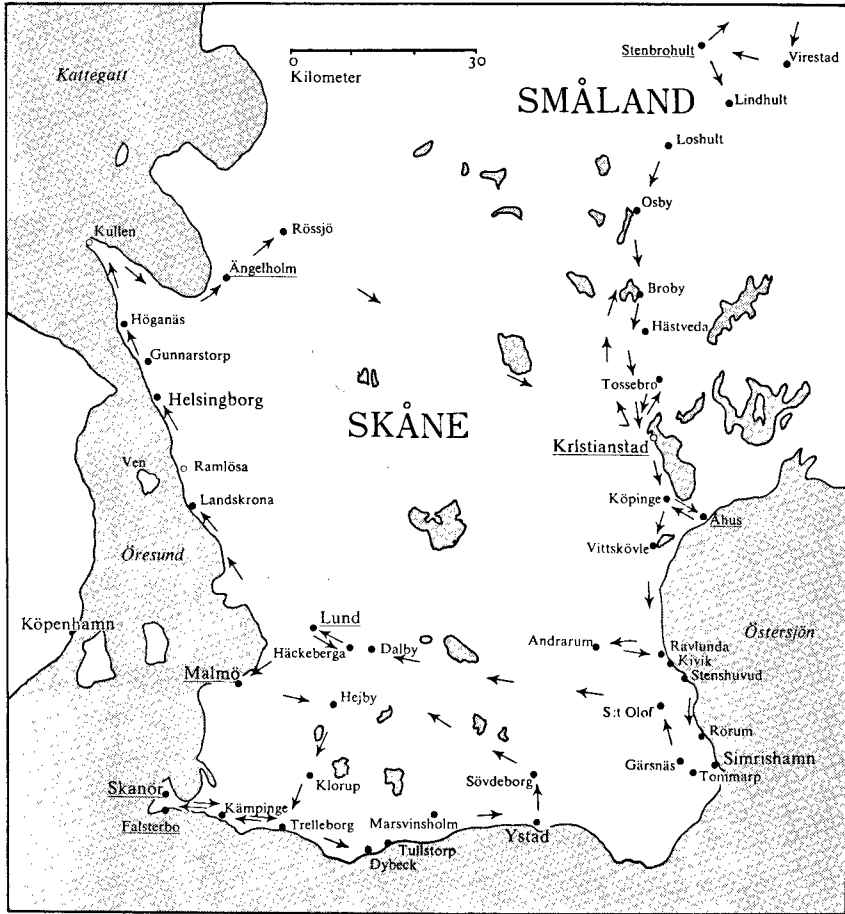


図1 リンネのスコーネ旅行 (Blunt 原図)

リンネの周辺 リンネの〈スコーネ旅行〉には二人の人物が深く関わっている。リンネと同じく創設問もない科学アカデミーの会員であった測地局長官ヤコブ・ファゴット Jacob Faggot は18世紀半ばのスウェーデンにおける農業革命の理論的指導者であったが、1741年の科学アカデミー論集に〈祖国の認識と記載についての考察〉と題する論文を発表しており、ここでファゴットは、様々な土地の資源と産業についての十分な知識は国家の経済的発展の前提として重要だと説いている。1747年にホーレマンが国会で述べた意見はファゴットの考えと全く同じである。この論文中でファゴットは地域記載についての計画例を示しており、リンネの〈スコーネ旅行〉の科学的記載はリンネの学識によるもの⁽⁴⁾

であることは言うまでもないが、その記載方法はファゴットの述べた事を手引きとすると考えられる。ファゴットの最もよく知られた著作は伝統的農業の近代化を訴えた1746年の〈スウェーデン農業の障害とその救済⁽⁵⁾〉であるが、この冊子の印刷刊行を強く勧めたのはホーレマンであったことはその序文に明記されている。リンネが故郷スモーランドの焼畑について書いた8月3日の文中でホーレマンの日記、ファゴットの1750年版科学アカデミー論集に載った論文⁽⁶⁾に言及して判断を両者の考えに委ねているのは、他の文章から考えて、彼等の立場の微妙な違いを示唆するが、これについては、別に述べる。いずれにせよ、以上に加えてリンネをしてスコーネに赴かしめたのがホーレマンである事を想起すれば、リンネ、ファゴット、ホーレマンの三人は多少の立場の違いを示しながらも互いに強く結び付き、影響しあっている事は明らかである。リンネは中でも地理的事実の収集に最も貢献したフィールド・ワーカーであった。

本稿の目的と資料 筆者は18世紀以降のヨーロッパ社会のシステム化の一環として後進地域であった北欧の農業革命⁽⁶⁾に関心を有しており、同時代の資料を求めるうちに、リンネの旅行記に注目するようになった。本稿の目的はリンネの旅行記が同時代資料として、農業および農村の研究に利用し得るか否かを検討する事にある。従って、リンネの記載対象と記載方法を分析することがこの書物の資料価値を知る有効な手段であり、本稿の目的に適うと考える。なお、紙数の都合もあり、作業は主に農業と農村に関する事に限ることとする。底本としては、Carl-Otto von Sydow 編の Carl Linnaeus: Skånska resa År 1749. WAHLSTRÖM & WIDSTRAND, STOCKHOLM, 1975. (以下 W&W 版) を用いるが Knut Hagberg 編の Carl von Linnés SKÅNSKA RESA förrättad 1749. NATUR OCH KULTUR, STOCKHOLM 1963. (以下 NOK 版) を適宜参照した。その他に当初は印刷されず近年になって刊行された日記原稿も参照した。Bertil Gullander 編の Linne i Skåne: P A Norstedt & Söners förlag, Stockholm, 1975. である。

2. 時代と地域

18世紀半ばのスウェーデン農業 スウェーデン農業は18世紀にはいって、内外の情勢から変化を迫られていた。中世以来のクリストファー⁽⁷⁾法典は1734年法典⁽⁸⁾に変わり、新しい時代への対応の必要性は感知されつつあったにも拘らず、農業および農村に関する規定は旧態依然たる太陽分割制を根底に据えたままであった。スウェーデン農業にとって、次第に商業化し、周辺地域をその経済圏に編入組織化しようとしていた西洋経済からの波に反応してその農業生産をネーデルランドやイングランド向けの穀物生産が可能なものにするこ

とが望まれ、同時に先進的西欧諸国からの需要に応じて森林資源を有効利用することも急務とされた。⁽¹⁰⁾ 当時創設されたばかりの科学アカデミーの論集に、ガッド、カルム、ファゴット、リンネなどが多くの農業に関する論文を寄せていることからこれは窺える。伝統的土地・村落制度、焼畑と森林資源などが最も多く論ぜられた問題であった。ファゴットはその代表的な論客であり、リンネのスコーネ旅行前の1746年に出た〈スウェーデン農業の障害とその救済〉⁽¹²⁾中で、ファゴットはスウェーデン農業の問題点として以下の事柄について述べている。すなわち、因習的土地利用、隷属農民の賦役、不合理な税制等に言及した後、太陽分割制のもたらす障害として、保有農地の不合理な配列、それに起因する固定的な農法と耕地強制を挙げて、いかにして大分割を実施するかを力説している。リンネの〈スコーネ旅行〉が出版された後の1755年ファゴットは〈我が国の一般的状況の病弊とその療法〉⁽¹³⁾と題する覚え書きを政府に提出している。この中では上に挙げた事に加えて、特に森林保全の問題を取り上げ、森林荒廃の原因がその共有制度にある事を指摘し、これを防ぐためには森林を分割して個人経営を導入する必要性を主張した。一方、畑地農業について、資源利用の不合理のために穀物輸入の重圧を受けており、これから解放されるためにも、最も自然条件に恵まれたスコーネの農業振興の必要性を強調している。

スコーネの農業 スコーネ地方は17世紀後半までデンマーク領であり現在でも、デンマーク的要素の強い場所である。スカンディナヴィア半島最南端に位置し、気候、地形、地質のいずれをとっても、本来のスウェーデン各地とは比較にならぬほど恵まれた地域である。スウェーデンは南北に長い国であるから、国内に大きな地域差があるのは当然であるが、それぞれの時代における農業の可否の境界すなわちフロンティアが国内を南北に分けてきた。おおまかにフロンティアが森林と耕地の境界とするならばスコーネは最も早く森林が消滅に近づいた先進地域であり、これに北接するスモーランドはその自然条件特に土壌の劣悪の故に、南部スウェーデンにあって現在まで森林の卓越する農業後進地域と言ってよい。スコーネが近代に至るまでデンマークに属したことはこの地方をして貴族的土地所有の発達した地域たらしめていた。すなわち、大土地所有者たる貴族の荘園に隷属的な小作農が集村を作って住み、主に三圃式農業を営んでいたのである。

リンネによるスコーネ概観 リンネはその〈スコーネ旅行〉の冒頭にこの地域の地理的状况を要約して載せている。⁽¹⁴⁾ これは位置、境域の自然的な記載の次に都市と県、郡などの地方行政組織を示しているが、これらが自然と人文両面の枠組と考えられたからであろう。自然現象については、各種の地形から土壌、気候、陸水、鉱物、植物、動物を言わば、網羅的に紹介しているが、相互の関係などは必ずしも示されていない。その中で、海岸の平野に関してその構成物質から、粘土質平野、砂質平野、泥炭質平野の三種に分類

し、それぞれの土地利用についても触れている。言うまでもなく、分類はリンネの基本的な方法であり、鉱物、植物、動物のいずれについてもその要約は分類から始まっている。

これに対し、人文現象については分類は記載の基礎となっていない。集落についての概観は細かい相違にとらわれることなく、大胆に一般化して、基本的事実を良く示す。

「村落は畑地の間の谷間の、水の得易い平地に立地し、一般に小さな都市ほどの規模がある。村内には道路が通じ、共同の水汲場がある。おおくの場合、カシ、トネリコその他の木が植えられていたり小さな園地があつたりする。

農家は一般に一戸ごとに中庭の四方を白いシッキイ壁で取りかこんでおり、ワラ葺の屋根にはコケが生えていることが多い。

耕地周柵は平地では数少なく、排水溝から掘り上げた土盛りからなっており、これが複数の村、時には複数の教区の土地を囲い込んでいる。この土地はライムギ圃、オオムギ圃、共同放牧圃の三つ区分されている」この記述は村落の形態と機能を統合的に捉えたものであり、リンネが意識していたか否かは別として、村落の自然、経済、社会各側面の関係を良く示している。

〈スコーネ旅行〉を通じて、リンネの自然現象に関する方法は静的で、時間的・歴史的経過、因果関係については必ずしも十分な考察が無いかもしれない。あるいは、分類結果は示しても、その体系は示していないとも言えよう。これに対し、人文現象については、巻頭の概観にかいま見るだけでも一般化とそれを支える綿密な資料の収集が相伴ってこの時代としては最も優れた記録となっていると考えられる。これは博物学者としてのリンネの評価を低めるものではなく、この〈スコーネ旅行〉が博物学者によって書かれた、人文現象を中心とした記録であることを示している。リンネは序文中で、「私の目的は自然と併せて個人経済に起こった事を十分に記載することであった。私は自分の見た事を全てそれぞれの場で出来るだけ簡明に書き記した」と述べ、祖国の土地の利用に資する事を第一としている。⁽¹⁵⁾

3. 焼畑に関する記載

焼畑に関するリンネの考え リンネの〈スコーネ旅行〉の NOK 版と W&W 版とでは 5 月 9 日、Växjö 付近の記述に違いがある。前者で Svedjor＝焼畑となっている項目が後者では、Gödselen＝施肥となっていて全く入れ替わっている。NOK 版の焼畑に関する当日の記載を訳出してみることにする。⁽¹⁶⁾

「焼畑はここスモderlandでは森の中なら何処にでも見られ、ある者にはこれは有用と言われ他の者には有害と言われているが、その焼畑が十分観察されそれが国土に対してな

す利益と損害が見積もられた。何故なら、人はこの焼畑について異なる場所を同じ法で規制することは出来ないからである。焼畑が全ての植物にとって栄養となる大量の腐食土を消耗しそれによって土地が確実により痩せることは論を待たない。しかしこれに対し、石がちのスモーランドの森について考える場合、そこでは森が過剰で、土地は小さい石で覆われ極めて恵まれておらず、ヘザーが生い繁って、改善は殆ど不可能である。農民が森を伐採し焼畑を焼くことで、彼はさもなくば全く利用価値の無い林地から普通は一回の結構な穀物の収穫を得、その後ヘザーが再びこの土地を覆い尽くすまでの数年間は、石の間に生えた良い放牧草地を得ることになる。直ちにマツかモミが種を落とせば、20ないし30年で新しい焼畑が可能となる。このようにして農民は、さもなくば、全く利用不可能な土地から多くの穀物を得ることができる。スモーランド住民が焼畑を禁止されれば、パンが大幅に不足するに至り、空っ腹をかかえて不毛の荒地に200年後の彼等の子孫のための希望を託しても、無慈悲な土地と石だらけの *Arabia infelix* からは 殆ど何の実りも得られないのである。Sed sit modus in rebus...」

以上の記載はいくつかの問題点を含み、更に、何故、同じはずの本に異なる内容が現れているのかという無視出来ない問題に何らかの示唆を与えるものと考えられる。8月3日には、焼畑について、最も長く、客観的に考えられる記載があるので、訳出する。⁽¹⁷⁾

焼畑の事実関係 8月3日 ここでは *lyckor* と呼ばれる伐木地での焼畑農耕はスモーランドの色々な場所にその影響を表している。ここでは、私の見たとおりに焼畑の特質を描いてみる。多くの広葉樹地域には、山勝ちで石からできた土壌があり雨で黄変したり火で赤変したやや乾燥したヒースと円礫の堆積が見られる。この表層には僅かの黒色腐植質もない。この極めて瘦薄な土地では高い場所にはマツが、多少低い場所にはモミとネズが成長している。これらは森の火入れ（これまでの焼畑のための）などの後に現れたもので、十分成長すると、20年から最高30年の内に再び伐木され火入れされる。森が成長を始め、アサ畑ほどの密度になったら、地面の高所は *Hypnum*、低所は *Politrichum* など一面コケでおおわれる。マツの針葉は毎年落葉してコケを覆い、そのためこのような場所特に森がやや開けた所では、ヘザーとそここのツルコケモモ以外は殆ど何の草も見られない。モミの間の低い所には、*Polytrichum* がブルーベリーの小枝、コケモモ、ヘザー、*lycopodium* と共に疎らに高く成育し、これらの森は放牧には最も瘦薄になる。しかし石の上には、*Hypnis*、*Lichenibus* などのコケが成長する。さて、森が十分成長すると根から上方にむけて、男の身長ほどの高さまで、枝を払われる。1年後、この森は切り倒され夏を越えて乾かされる。最後に風下から点火され燃やされる。全ての小枝、大枝にコケまで燃えて、底土になじんでしまい、石は皆、剥き出しになる。焼いた後に残った幹は

smetved と呼ばれる。この smetved によって伐木地を取り巻いて柵がゆるく周らされる。ここには最初の夏にカブが蒔かれ、これは極めて大きく甘くなる。その後夏至の後か秋の初め、フィンライムギか冬ライムギが播種され、鎌でならされる。翌年、良いライムギが実り、刈り取られたものはウマの背で家に持ちかえる。穀物を収穫した翌年も伐木地には柵が残り、よい牧草がまばらに生える。ここにはウマや若い家畜が放牧される。次の冬には柵の smetved は解体され、屋内で燃料とされる。その後伐木地は放牧地として残され、そこには、小さく低い草が生える。特に Fårgräset Fl.95, Veronica Fl.8 とここでは Bräken Fl.843 と呼ばれるキツネノオなどが生える。最後には、ヘザーが優勢となりその土地全体を覆い、次いで、至る所に、マツ、モミ、ネズが現れ始める。そのようにして瘦薄化された土地には、乾き、栄養も無く、利用価値の無いヘザー以外の植物は生えない。フィンランドにおけると同様、この焼畑はこの地方で極めて盛んで、永年にわたる焼畑のために土地が極めて瘦薄化し、最大の瘦薄が出現している原因はこの事以外には無い。スモーランドの他の地方と同じく、スンネルプーにおいても、広大な土地が全く森の無い裸地となっているのが認められる。そこでは、膝の高さに届く背の高いヘザーが繁り、乾燥した底土上には、ヘザーと時に見られるいくばくかの Fårgräs 以外、何も生える事が出来ない。このような土地は ryar と呼ばれ、この事からこの地方の極く多くの農家名は ry という語で終わるか始まるかしている。これらの ryar は過失による山火事かあるいは以前に農民が lyckor の伐木地を苦勞して広げ過ぎたために、マツがひとり生えし周りの土地にその種子を飛ばせなくなったかの何れかが原因であり、その後、ヘザーがこの土地に侵入しマツの種が自播するのを妨げたのである。これが少なからず、土地を害している。焼畑がどのように土地に利益をもたらすか損害をもたらすかをここで示す必要は無い。男爵ホーレマン閣下がその日記で、また長官ファゴット閣下が1750年版王立科学アカデミー論集などでなしたごとく有識の同胞が既に十分焼畑の利害を示している。

その他の焼畑に関する記載 5月5日 焼畑が道の両側に見られる。木の柵で囲まれている。3年間しか役にたたぬ。1年目にカブ、2年目にライムギを播種し、3年目にはウシを放牧する。

5月6日 Korsberga の牧師館の建物の木が大きい。直径が1アルンを超える。⁽¹⁸⁾ 現在ではそのような木を見付けるのは困難である。農民が林地を焼いて多くの焼畑を開いているから。

5月8日 ヘザーが至る所に繁り、放牧地を覆っている。牧草を追い出し、土壌を瘦薄化させる。火入れ無しにヘザーを根こそぎする簡単な方法があればスモーランドに最大の貢献をなすことになる。

5月17日 故郷ステンブルーフト付近で。……ここスモーランドではハルタイムギが蒔かれることのまずない焼畑以外では滅多に見られぬフユタイムギが今日初めて穂を見せた。……

このタール用伐木は私には、森に対し人々が一般に考えるほど害をなすとも見えない。いくらかの木は枯れるが、森林が十分にあり、さもなくば焼畑に使われるばかりの土地においては農民と国家にとっての利益が極めて大きいからである。

スコネにはいって。……ユーイング地方では、これらの山には、全ての腐植土が繰り返し焼かれた後には、土が砂利のみからなり、純粹のヘザーとネズの茂み以外の植物は成長しない。火入れによって土壌が改善されることはない。毎年一人生えする小さなシラカバはこのおそろべき火によってすぐに死滅するので、落葉が腐植質を増すことはない。ヘザーが焼き払われた後、小さな草が生えて、農民はそれから多少の利益を得る。それも再びヘザーが生えて来るまでの事である。……

6月25日 広大な畑地の間の水が集まる小さな谷に多くの様々な泥炭坑が見られる。何百年もの年月が、後の世代にとって貴重な必需物である肥料堆のごとき黒色腐植質や分解植物質を雨や風によって侵食してきた。そして子孫たちはこの泥炭を採掘し空気、雨、高温によって分解せしめ長い年月の絶え間ない人間の利用によって瘦薄化した畑地にこれを施肥する事になるのである。木を持たず、木を植えず、植えようとしめない住民は現在やむなく、自然が後々の子孫に残さんとする資本に手を付けている。純粹に石ばかりではない土地における焼畑は土地を破壊する経営であるが、泥炭を焼くのはそれよりも20倍も害がある。何故なら、あたらしく以前の通りの泥炭が成長するまでには、森は20倍も成長するからである。いくつかの場所では、泥炭坑内の最良の泥が砕かれ、畑地に運ばれ、それにより使い道のある畑地が施肥されるのが見られる。

8月8日……ここスモーランドの土地は極めて起伏が大きく、乾き、瘦せており、我々はしばしば最も美しい野が焼き畑によって焼かれひどく損なわれてきたのを見た。焼き畑は土壌についての考慮を欠いたまま行われ、それ故、土壌をより痩せさせたのである。

リンネの焼畑観の検討 リンネのスコネ旅行の目的地は勿論スコネであったが、その往復で彼はスモーランドを通過し、その際、同じく通過した他の諸地方すなわちエステルイェートランド、ナルケなどに較べると遙かに強い関心をスモーランドに対し示している。中でも焼畑とそれに関連する火入れを伴う農業技術にはかなりの行数を割いて、その問題の重要性を指摘している事が注目される。

スモーランドに入って数日を経た 5月5日以降、焼畑、ヒースの火入れ、タール用伐木、泥炭地への火入れ等に言及しているのは前項に引用した通りである。8月3日の記載

はスコーネを離れて復路再びスモーランドにさしかかった際のものである。往路5月9日のNOK版にのみ見られる文章はリンネ自身の焼畑についての考えを示すかあるいはまだ復路におけるのとは違った考えを往路には有していたという点とW&W版においてはそれが他の殆ど無縁の文章と差し換えられているという全く意味の異なる点で重要である。

5月9日NOK版でリンネは、「焼畑について地域による条件の差を無視して全国を一律の法で規定するのは誤り」と言う意味の考えを明記した上で、「スモーランドでは土地条件が劣悪だから、焼畑が破壊的である事を認めてもなおそれ以外の資源利用法がない」という考えを明らかにしている。⁽¹⁹⁾この段階でリンネが焼畑に対し同情的であった事は明らかである。地域差を尊重し、やみくもに中央からの方針で地方を一元的に見ることを否定する立場を鮮明にしているのは何故か。一つは彼の豊かな旅行経験であり、それに基づく自然条件の地域差の認識に他ならない。これは博物学者としての立場とも言えよう。二つには彼が問題のスモーランドの出身で、豊かなスコーネやウプランドでも長く生活してきた事によっても考えられる。スモーランドの自然条件の劣悪なことは一般的には農業技術水準の向上している現代においてすら殆ど決定的で、まして18世紀半ばの段階では、リンネが焼畑以外に多少とも有効な土地利用法がないとしたのも、このスモーランドに関する限り頷けるのである。彼の文章には焼畑が土地荒廃の原因であることは彼自身がよく知っているという自負が感じられ、その上でスモーランドに関するかぎり焼畑のみが農民を養う唯一の手段と結論しているのである。

8月3日には、リンネは焼畑を農業技術体系として客観的に報告しているが、その得失の評価が彼に課せられた任務であるはずにも拘らず、専ら焼畑による土地の荒廃のみを論じて、スモーランドの農民が焼畑以外に食料生産手段を持たないとした5月9日NOK版での熱心な主張はその片鱗さえ示さない。そして焼畑の利害得失についての判断はここで示す必要はないとして、これをホーレマンとファゴットに委ねてしまっている。これは何を意味するのであろうか。

焼畑による土地荒廃は往復いずれにおいても強調されている。リンネの立場からすれば、焼畑を禁止するなら、焼畑に代わる農業の体系をスモーランドの農民に示すべきであるにも拘らずこれを行っていない。

<スコーネ旅行>のW&W版で焼畑に関する文章と差しかえられている施肥についての一文はここでは引用しないが、焼畑とは関係しない。NOK版とW&W版のいずれが最初に書かれたかは重要な意味を持つが、両者を比較してもこれについての判断は不可能であった。しかし、この点については、Gullander編<スコーネにおけるリンネ>が日記

原稿に基づいているために、明確な解答を与えてくれる。⁽²⁰⁾すなわち、この日記原稿には、NOK 版とあまり変わらない立場から書かれた焼畑に関する文章がある。この事から、最初 NOK 版では日記原稿を基礎にして焼畑に関して同情的な文章を載せていたのに、何らかの理由で次の W&W 版ではこれが差しかえられた事が分かる。日記原稿の 8 月 3 日分はどうであろうか。

「今日は至る所に焼畑用地が見られた。これは何をすることも適さない土地である。石に覆われており、コケ、ヘザー、マツがはえており、リンゴンイチゴが生えることも殆どないから、一般の人間あるいは所有者にとっては、焼畑にしてカブかライムギを栽培しなければ、何の利用価値もない。所有者には、この石が全て土壌で覆われるまで 20~30 世紀も待つ時間はないし、その間にも山火事がしばしば全て価値のある物を焼いてしまうから、何処の土地でも焼畑が非難されるべきものではない」となっている。W&W 版でも NOK 版でもこれに相当する部分は先に紹介した通りである。日記原稿よりも遙かに詳細に焼畑の事実関係を明らかにしていることが分かるが、同時に、リンネ自身の焼畑についての考えは、スモーランド地方に関する限り焼畑を致し方ないとする点で、往路、復路で変わり無かったのである。

従って、NOK 版が最初に刊行され、8 月 3 日の焼畑に関する判断はホーレマンとファゴットに下駄を預ける形に変えられているのに加えて、それでもなお足りず、W&W 版がだされて、5 月 9 日の当初示されていたリンネの焼畑についての判断は完全に抹消された事が分かる。

これが何故行われたかは、ホーレマンおよびファゴットの考えとリンネの考えに対立が生じ、そのいずれか、おそらくは行財政の権力を握っていたホーレマンからの要請あるいは圧力があつたのではないかと考えられる。

4. 畑作農業・農民・農村についての記載

畑作農業についてのリンネの記載例を以下に示す。事例 1 はスコーネについての、事例 2 はスモーランドについての総括であり、日記原稿には全くないものを後になって挿入した文章で、地域内の小さい違いを止揚して、リンネ自身の考えでまとめている。記載事例 3 はマルメ市北方のバルセベックの荘園について、具体的に記述して伝えるところが大きい。

記載事例 1 6 月 11 日……「遠く離れたストックホルム近辺に住む我々から見るとスコーネの農業は彼らが使用する犁が長過ぎるように不可解なものである。二頭で牽けるはずの犁を牽かせるのに 4~6 組のウマを繋ぐ農民がいる。農民たちは大声で呼び交わし、歌

を歌いながらしばしば2.5キロメートルもある畝を犁き起こして行く。…略…スコーネの農民は今の若者が容易に代えてしまう祖先のやりかたに大変執着する。我々が新しい計画を重んずるごとく彼らは古い経験に固執する。我々が経験に不信を抱くごとく彼らは経験に確信を抱く。…略…

A 平野部の土地は三つに区分される。オオムギ圃、ライムギ圃と共同放牧地である。これらは順番に一年ずつ休閑するが、その年に、共同放牧地と呼ばれる。

B 共同放牧地すなわち休閑地は夏期、家畜の唯一の放牧地でその他には放牧地は皆無である。

C 各圃場は周柵を立てるための膨大な作業を軽減するために、隣接する二・三の教区を包摂するほど大きい。

D この地方の冬は極く温和なために、厩舎で飼われる家畜は僅かであり、厩肥は全く得られない。

E ヘザー等の根が強くからみあって、農民の犁を牽くウマは一塊りの根のためにしばしば立ち往生してしまう。

F 全体が平野であるスコーネのウマは体は大きい力が極く弱い。その原因の一つは夏期の放牧地が僅かなことであり、もう一つは冬季ムギワラのみが給餌されるからである。…略…

G 多くの畑地を持つ農民は多くのムギワラを得るが干草は僅かしか無い。家畜にはムギワラが与えられるがその栄養は乏しく、量だけは多くの家畜に十分である。従って、もし農民が十分な肥料を得ようとするならば、彼は多くの家畜を飼わねばならぬムギワラを捨てるわけにはいかない。ムギワラを餌とするために家畜が弱ってしまうので、農民は犁を牽く多くの家畜が互いに助けあうようにしなければならない。スコーネでも最も固い粘土が見られるロンマでは、ドイツ式に二頭の家畜で犁を牽かせようとしたが、これは農民には何の役にも立たなかった。更に多くの貴族領で成功し始めているように、もし農民がラルスメツライムギを播種すればムギの等級は4級が15~30級にもなるが、それまでにまず、測地官が農民(の土地)を切り離さなければならず、一定の土地が共同放牧地とされねばならない。もし、共同放牧地に夏の間、ライムギが作付けされておれば共同放牧地以外に放牧地のない家畜は何を食べて生きのびるのかということになる。その場合、農民達の最大の作業である土墾や周柵の築造は何百倍にも増える。…略…」

記載事例2 8月8日……「スモーランドの畑作農業は一般に次のごときものである。畑地は一圃式で利用され、毎年、休閑無しにライムギとオオムギが交替に播種される。オルダー⁽²¹⁾犁は通常一組の牡ウシに牽かせ、ウマは稀にしか使わない。この犁の鉄の刃先は厚

く鈍いが、それは土が軽いからである。畑地は春に同じオルダー犁で三度すかれる。犁起こし、これと直角に犁起こし、犁戻す。犁をかける毎にハローをかけ、最後に直角にかけろ。ハローはステンブルーフルト辺りのものと同じように透き間が大きく、拳大の石に適している。このハローは一頭のコマで二・三時間は無理無く牽ける。ライムギは3月の終わり頃、3月24日から4月8日頃の間には播種される。オオムギは5月の1日から20日の間に播種されるが、それはそれよりも遅く蒔くと、夜が寒くなるまでに滅多に完熟せず、⁽²²⁾ Kornblek が侵入して穀粒は定着しないからである。オオムギの播種前にはいつでも施肥されるがライムギの場合は施肥しない。施肥量は極く僅かで、より北の地方程多くない。ここスモーランド地方で冬ライムギと呼ばれるラルスメツソライムギは僅かしか作付けされず、人々は、もしこのフィンライムギが3年毎に焼畑に播種されればより良い品質になることを経験によって知っていると言う。夏至の頃、あるいはそれから14日ほどの間に播種されるフェッレライムギは畑地においても秋までに成長して大きくなるが、初霜が非常に早いと、屠殺するはずの家畜を芽の出た畑地に放してその芽を食べさせる習慣がある。フェッレライムギは夏至の頃に蒔かれれば、1年後の7月には実るが、秋に蒔かれたものが8月以前に実ることはない。エンバクは白色、黒色両種が播種されるが、黒色種は大抵、山がちの所に、白色種は平坦地に蒔かれる。カブはこの地では畑地に蒔かれることはなく、焼畑にのみ蒔かれる。その方が大きく甘くなる。アサは農家の主婦が最良の畑地を選んでそこに蒔く。ドイツ種以外では草丈がやや低く灰色がかっているが、極く柔らかく美しい。

穀物の収穫は何処でも小鎌で行われ、そのため農婦の背中の負担は大きい。落ち種は少なくなる。20株刈った後を、二人の男がこれを束ね、他の二人がこれを穀物架に架けて行く。2架で1山、1山で10台分と数える。束ね材は刈り取ったワラである。ライムギで8日、オオムギで14日間、穀物架に架けていると雑草が枯れる。

畑地の周囲に排水溝は全く無く、排水溝掘削が有効か否かの結論もまだ得られていない。何故なら農業の第一の原則もまだ解明されていないからであり、我が国の経済家の最大の失敗は彼らが全国に一律の法を施行しようとした事にある。何故なら、畑地の組成が砂礫、飛砂、マール粘土、腐植と石のごとく違ったものであったり、その立地が高燥に対し低く酸性であるというように異なっていれば、その利用方法は別であるべきだからである。腐植と粘土からなる低地におけると同様に、砂質の閑地に高い植え床を作れば、人は直ちにその誤りに気づくはずである。スコーネの住民はその経験に基づいて畝をつくっているが、経済家の確信は今では、全ての畑地に深い排水溝を掘ることにあるが、これも時の経過が明らかにする事である。」

記載事例3 デンマークと向かい合うパーセベックの大荘園について…7月7日…「農業はここでは日々改善されている。大きな石が掘り出され運び出され、水が滞らないように枝排水溝、主排水溝が掘られた。畑地は測量に従って新しく区分し直され、農民は小さな地条をあちこちの畑地の一つずつ保有する事はなくなり、小さな畝は幅広の中央部がやや高くなった畑に統合された。それまでは、小さな畝には穀物が良く実っても、その畝の間ではひどい作柄だったのである。通常のもの以外の畑地排水溝掘削を嫌う農民は荘園の夫役に出る際に、監督されながら自分の畑地の排水溝を掘らねばならない。ここではそれまでスコーネでは眼にしなかった正しい客土が行われ、畑地内に低い部分が残らないように客土によって土地を平坦化するのである。今、畑地に撒かれた肥料は海からの強風に飛ばされないように、全ての習慣に逆らって、直ちに犁で埋め込まねばならない。このスコーネでは逆に考えられているが、北の地方では最も優れた経営者達によって畑地を維持すると考えられる方法が陸軍中將ハミルトンによって実行されている。彼はあらゆる方法で良い経営を行い、私がこれまでに見た何処よりもこの荘園を改善してきた。」

5. 内容・方法の検討

スコーネの農業についての記載 記載事例1でリンネがスコーネの農業を論ずる時、主たる問題としているのは、スコーネ農民の特性、農法、採草地と家畜の三点と考えられる。すなわち、農民が保守的で旧来の慣行に固執して、スウェーデン中部のありかたに比べて不合理なことを温存していること、農法に関しては、この地方で三圃式農業が卓越すること、この地方の開発が早く行われたために採草地となる林地がほとんど残っておらず、休閑放牧地が僅かに家畜を支持するにすぎないことを指摘する。一般的にはこれらの指摘はその後の農業史の研究結果と一致しており正しいとしてよいが、通過した各地域での記載はやや断片的であるにせよ、事例の要約にはない生き生きとした記述が随所に見られるから、記載事例1のごとき要約の検討をもって事足りるとするわけにはいかない。しかしこのなかで、地条の長さが時に2.5マイルを超えること、各圃場が周柵の建設費を軽減するために、複数の教区を包み込むほど大きい共同周柵を作っているとしていることは極めて興味深い。これはスウェーデンで中世以来極端な発達を見た太陽分割制による地条分割とそれに対応して成立した村界を越えた耕地分割の単位集国 ⁽²⁶⁾GÅRDESLAG の存在 ⁽²⁵⁾を示唆している。更に、ラルスメッソライムギの播種に関連して、測地官による農民の土地の切り離しとそれに伴う共同放牧地の永久的設定と土塁・周柵の築造の問題はこの時代の農村の記録として重要である。ここに挙げた事柄を考えるにあたっては先に触れたフェゴットの二つの論文を思い出さねばならない。これらはリンネの旅行に前後する1746年の

＜スウェーデン農業の障害とその救済＞および1755年の＜我が国の一般的状況の病弊とその療法＞である。この内、前者はリンネの旅行に先立って刊行されており、リンネがこれを読んだうえで旅行している事を念頭に置くべきである。リンネが農業の言わば近代化としてのラルスメッソライムギの播種に関して、測地官による農民の土地の切り離しという場合、前後の文脈から多数筆に分かれた農民の保有地を一筆に集めてそれぞれを切り離すという意味でない事は明らかである。従って、これは測量を行って正確な境界を確定する必要を言っているにすぎない。そして農民各自がその土地で自由な土地利用を行おうとすれば、家畜の侵入等を防止するために、その境界上に周柵等が必要となり、その経費、労力が到底まかなえるものではない事を述べている。これは要するに、耕地の細分・錯綜についていっているのであり、実はファゴットが既に述べていることなのである。しかもファゴットの場合、多数筆に分散した土地を一筆に統合する大分割 STORSKIFTE を主張しているのに対し、リンネの場合は具体的な解決方法を示していない。この点で客観的な事実の記載者としてのリンネと改革を主張する運動家としてのファゴットの立場の相違が顕取される。

このスコーネの農業に関する要約中では、著しい一般化が行われている事を承知して読むべきである。例えば、この地方の農業が全て三圃式のごとき記載がなされているが、実際の旅行記では、地方による農法の相違が綿密に描かれている。すなわち、スコーネに入ってからすぐの5月18日、シンクレルスホルム付近の農業についてライムギとオオムギを交互に作付けしオオムギの播種前に1年おきに施肥される二圃式農業である事を明記している。その他にも5月21日から24日にかけてリスペリヤ周辺の地方で特に砂質の地域で7～8年、8～9年毎に一度あるいは二度穀物を作付けするが、その後は放牧地に戻し施肥は全く行わないという注目すべき報告をおこなっている。

更に、5月26日、イエアード郡の場合には、三圃式ではあるが、所により休閑地の半分はマメ類を播種し農民はマメ類が土地を肥やすと信じていると書いている。リンネ自身がマメ類の効果について既に知っていたとは思えない文章であり、地方的な農民による農法の改良が始まっていた事を示して興味深い。

スモーランドの農業に関する記録 記載事例2はスモーランド地方の畑作農業に関する要約であり、事例1と同様に、当初の日記原稿にはないものが成稿の段階で挿入されたものである。スモーランドの焼畑農業に関しては既に紹介したごとき記載をリンネはおこなっているが、ここでは畑作農業についてまとめている。畑作農業 ÅKERBRUK と焼畑農業 SVEDJEBRUK は常に明確に区別されており、例えば同じライムギが普通畑 ÅKER と焼畑 SVEDJE に栽培されても両者が混同される事は決してないから、記載事例2の場

合、対象は畑作に限定されていると考えるべきであるが、一部は焼畑農業にも触れている。いずれにしろ、この部分でのリンネの記載は、スモーランドの畑作農業が一圃式農業であるとして、この一般化に基づいてなされている。しかし、この事例中、最も注目すべきなのは、「我が国の経済家の最大の失敗は彼らが全国に一律の法を施行しようとした事にある。」とする点である。同じ意味の事をリンネは焼畑農業に関して、5月9日に既に述べているのである。土地条件が違えば、土地利用も異なるべきであるというこの主張が繰り返されているのは何故か。この言わば当然の一般論が必要であった当時の状況もさることながら、スモーランドの焼畑農業に関するリンネの記載の全体を思うならば、スモーランドの特殊事情にたいする理解を要求し、より具体的には、焼畑農業の根絶を主張するホーレマンやファゴットに対し、自らの考えを示そうとしたと考えざるを得ない。

ファゴットやホーレマンが、農業を重視する一方で重商主義的な政⁽²⁷⁾党に属し、政治全般に関する関心が強く、既に国際的な視野でスウェーデン経済を見極めようとしていたのに対し、スモーランド出身のリンネが故郷の固有文化への愛着と、既にこの国を飲み込もうとしていたヨーロッパ経済のシステム化の波を未だ認識していなかった視野の狭さから、一般論の形を借りてスコネ農業についての自分の考えを述べたものと考ええる。

荘園の経営に関する記録 パーセベックの貴族領大農場についてのリンネの記載は先進的な農業経営が貴族によって指導されていることを明示していて興味深い。小作農が夫役という手段を通じて強制的に保有小作地の排水溝を掘る状況は、記載事例1で退屈的な農民の性格を強調している点と重ね合わされて、当時の社会が見えてくるのである。

客土、除石、施肥、排水溝掘削などはいずれもスコネ農業の基本条件であるが、それらの技術改良が大土地所有者によって積極的に行われたことが注目される。耕地の細分・錯綜がある限り、これらの改良事業が大規模かつ有効に行われることは在り得ない。小作農はヨーロッパに展開しつつあり、スウェーデンにも波及しつつあった農業革命には勿論関心も知識もない。そのような状況下で、改革の先駆者たり得るのは、一定の領域に領主的専制権を有した貴族であった事が示されている。

いずれにもまして注目されるのは、「畑地は測量に従って新しく区分し直され、農民は小さな地条をあちこちの畑地の一つずつ保有することはなくなり、小さな畝は幅広の中央部がやや高くなった畑に統合された」という記述である。ファゴットの努力により、耕地錯綜の弊害が漸く認識され始め、測地官の耕地統合に関する役割が法に定められたのが、スコネ旅行の年、1749年であり、大分割の実施が法に定められたのが1757年である。従って、パーセベック荘園についてのリンネの記述は、一般にファゴットの努力によって国内に行われ始めたときとされる大分割がここでは、1749年以前にすでに成されていた事を示し

ている。筆者の知る限りでは、ファゴットはリンネによって記載されたパーセベックにおける土地改革には言及していない。従って、ファゴットがこの事実を知っていたか否かについては、積極的な答えは得られないにしても、ファゴットに唱導されたとされる大分割が既に先例と成るべき事実をスコーネに有していたと考えられることは極めて重要であると言わねばならない。リンネ自身が彼のこの記載の重要性をどれだけ認識していたかについては疑問がある。その理由は、記載事例1のスコーネ農業の要約において、耕地錯綜の深刻さに触れその改良が周柵等の築造経費等を考えれば非常に困難なことまでは述べておりながら、パーセベックの事例に基づく見解を示していない事にある。パーセベック以外の荘園においても各種の先駆的な農業改良についてはリンネは大きな関心を示しており、6月25日のデュベック、6月30日のクラゲホルム、7月2日のゼツデポリイ、7月3日のヘッケベルグ、7月6日のスベンストルプ、7月8日のベルテベルグ、7月22日のグンナルストルプ、7月25日のラェルクスホルム等数多くの記載がある。リンネは農業改良の可能性を熱心に追及し、各荘園の実例も挙げたが、彼の観測には荘園については楽観的、一般農村については悲観的という対照が見受けられる。すなわち、スコーネ農民については陽気でよく働くとしながらも、その農業経営については旧態依然たるものとして低い評価しか与えていないのに対し、荘園の所有者の熱心な農業改良を高く評価している。彼の記述を読む限り、例えば、ファゴットの目指した耕地錯綜の解消は荘園においては可能であるが、一般農村においては不可能と考えていたと思われる。パーセベックの事例を一方で評価しながら、記載事例1でこれを無視したのはそのためであろう。

統一的な権力を欠く言わば民主的な一般農村では、農民間の利害が対立して大分割など到底不可能と考えたのだとすれば、リンネは農業改良を資源の開発と利用方法の改善として、そこに社会的な改革の視点を持たなかった事に理由が見出される。ここに、根本的な社会改革、具体的には、農業改革のためには村落共同体の解体をも主張したファゴットとの基本的な相違がある。

6. おわりに

リンネが<スコーネ旅行>中に書き記した対象は地域誌に求められる殆どあらゆる事柄に及んでいると言い得るが、本稿では紙数の都合もあり、極く限られた分野について検討するにとどまった。中でもリンネ自身が忠実な観察と詳細な考察を行った耕地周柵・周壁についてあまり触れなかったことは気に懸かるが、これについては別に考えるつもりである。

本稿の目的とした<スコーネ旅行>の資料価値の検討という点では、全編を通ずる精密

な記載はその客観的な姿勢と併せて十分信頼し得るものと判断した。リンネが再度述べている。地域による違いを無視して全国を一律に論ずることはならないとする考えは、旅行記の体裁をとったこの著に十分体现されており、多様な現象についての地域差が観察・記録されている。これは生物分類学者としてのリンネが地理的観察者としてもその本領を発揮したものと考えられる。

既に述べたごとく、リンネは農業の改良を資源あるいは自然環境との関係で考えようとしており、社会的な改革と結び付ける態度を持たなかった。自らの立場が政策立案に寄与すべきものであることは承知していても、ホーレマンやファゴットのごときその決定者ではないことをも弁えていたというべきかもしれない。それだけに、事実の記載者として、その項目の選定と内容に軽重を付した判断の客観性に信頼を置き得るのである。

スモーランド地方の焼畑に関する彼の態度の動揺など、冷静にあるいは批判的に読まねばならない部分があることは資料として当然で、それはむしろ利用する側の責任である。

註

- (1) Wahlström & Widstrand 社から刊行されている。
- (2) Carl Linnaeus: Skånska resa år 1749. P.9.
- (3) Wilfrid Blunt: Carl von Linne. pp.193-195. Stockholm, 1977.
- (4) E. Ingers: Bonden i svensk historia. p.282. Stockholm, 1948.
- (5) 前掲(4) p.282.
- (6) 拙稿：フィンランドにおける農業革命(1)、(2)、奈良大学紀要5、6、昭和51、52年。拙稿：フィンランドにおける太陽分割制の廃止をめぐる、「歴史地理研究と都市研究」昭和54年。
- (7) Kristofers Landslag 1442. これについては拙稿：中世スウェーデンの地方組織と農村社会、人間科学論集13・14号合冊号。大阪府立大学人間科学科研究会。1983。
- (8) SVERIGES RIKES LAG gillad och antagen på Riksdagen År 1734.
- (9) 前掲(6)参照。太陽分割制とは Solskifte の訳語で、スウェーデンで中世以来発達した土地村落制度で、持ち分に応じた屋敷地の間口、配列順が耕地の配分の基準とされる。
- (10) Eli f. Heckscher: Svensk arbete och liv. pp.168-186. Stockholm, 1957.
- (11) Jacob Faggot: Svedjande samt utväg til Hushållning med skogar. 1749.
Pehr Kalm: Några tankar om Nyttan af Storskifte. 1760.
H. M. Clas: Nyttan af ägornes läggande i STORSKIFTE. 1767.
Johan Kraftman: Tankar om den Wanmakt uti hwilken Finska Landtman sig finner. 1761.
Pehr G. Gadd: Om medel til Allmogens Bärning under Säd-och Foderbrist.

1785.

: Försök til en systematisk Inledning i Svenska Landtskötselen.

- (12) 前掲(4)
- (13) 前掲(4) pp. 288-294.
- (14) W&W 版 pp. 14-27.
- (15) W&W 版 p. 10.
- (16) NOK 版 p. 54.
- (17) NOK 版 p. 384.
- (18) 1 aln = ca 60 cm. 長さの単位
- (19) NOK 版 p. 54.
- (20) 1 はじめに の章を参照。
- (21) årder. 最も原始的なタイプの犁。Ragnar Jirlow: Die Geschichte des schwedischen Pfluges. Stockholm, 1970.
- (22) kornblek の意味は不明。ムギの穂が白くなる病害か。
- (23) fälleråg. fälle は焼畑のために木を倒すこと。倒した場所を意味する。
- (24) 例えば David Hannerberg: Svenskt agrarsamhället under 1200 år. Stockholm, 1971.
- (25) 拙稿: 中世スウェーデンにおける太陽分割制の村。大阪府立大学紀要(人文・社会科学) No. 34, 1986. 拙稿: 太陽分割制における制度外農地、「人文地理学の視園」大明堂 1986。
- (26) UIf Sporrang: Jordbruk landskapsbild. p. 20, Lund, 1970.
- (27) 前掲(4) p. 281. hattpartie 党員であったとされる。